



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4606 号 2018.9.11 発行

### 企業主導型保育所に5万人分の応募 内閣府は待機児童対策の計画を上積みへ

産経新聞 2018年9月11日

松山政司少子化対策担当相は11日の記者会見で、待機児童の解消に向け、保育の受け皿として整備している「企業主導型保育所」について、本年度の企業からの応募が5万人分を超えたと明らかにした。内閣府は本年度の整備計画を当初より1万人分上積みし、年度末までに3万人分を確保する。

2016年度に創設された企業主導型は企業が自社の従業員向けに設置する施設。認可外だが、整備費や運営費などで認可施設並みの助成が受けられる。17年度末までに約6万人分が整備され、政府は18～20年度の3年間でさらに6万人分を確保する予定だ。

松山氏は「制度の周知が進み、企業側のニーズが高まっている」と話した。

### 私たちは「買われた」 児童買春被害伝えるパネル展

神戸新聞 2018年9月11日



女性らの「買われた」体験を下に再現された写真

「体を差し出す代わりにおにぎり一つもらった」「“男性”は私を道具としてしか見なかった」。虐待や貧困、いじめ、障害などさまざまな困難を背景に、児童買春の被害にあった少女らが、自身の体



験や思いを伝えるパネル展「私たちは『買われた』展」が20、21日、神戸市中央区磯辺通2の三宮コンベンションセンターで開かれる。会場には写真とともに、少女らの心の声をつづったパネルや日記も並ぶ。(石川翠)

中高生世代の少女を支援する一般社団法人「C o l a b o (コラボ)」(東京都)と、かつて売春を経験した10～20代の女性が、2016年から各地の協力団体とともに全国で開催している。

「困ったときに声を掛けてくるのは、手を差し伸べようとする大人ではなく、性的に利用しようとする人ばかりだった」という少女たちが、実情を知ってもらいたいと企画した。

日本では1990年代から児童買春を「援助交際」という言葉で呼び、「気軽に、遊ぶ金

欲しさ」というイメージで語られてきた。背景にある社会からの暴力や、被害のトラウマ（心的外傷）などを受けながら生きる少女たちの姿を伝えようと開催に至った。

パネル展では、写真や体験談、手記のほか、「大人に伝えたいこと」をテーマにしたメッセージなど約100点が並ぶ。

神戸での開催には、非行歴のある少年少女の立ち直り支援をする神戸市灘区のNPO法人「ホザナ・ハウス」が協力。森康彦代表理事（59）は「支援してきた中で、援助交際の経験のある子どもたちは多い。SNSの普及もあり、生きる手段として選択してしまう現実を知ってほしい」と話している。

20日は午後1時～8時、21日は午前9時～午後5時。入場料1500円、高校生以下無料。問い合わせはホザナ・ハウスTEL078・858・8566

### 障害者がロボットで接客するカフェ 11月に期間限定オープン 重度でも遠隔操作

産経新聞 2018年9月11日

重度障害者による遠隔操作で給仕する分身ロボット「OriHime-D」=8月、東京都港区



全身の筋肉が徐々に動かなくなる筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者など重度障害者らが「分身ロボット」を遠隔操作して接客するカフェが11月、東京・赤坂にオープンする。障害で外出が困難な人にも働く機会をつくりたいと、ロボット開発のオリィ研究所（東京）や日本財団などが企画した。

12月の障害者週間に合わせた期間限定の試みだが、2020年東京五輪・パラリンピックに向け常設店のほか、企業での採用を目指す。

開発された分身ロボット「OriHime-D（オリヒメディー）」は高さ約120センチ、重さ約20キロの人型。額のカメラが捉えた映像が離れた場所にあるタブレット端末などに映し出され、障害者が端末を操作して動かし、会話もできる。

8月のお披露目会では、筋力が低下する「自己食食空胞性ミオパチー」の村田望さんが自宅から端末を使いロボットを操作。参加した親子に「いかがですか」と話しかけながらチョコレートを提供した。

### 誰にも相談できなかった～精神疾患の親に育てられて

NHK ニュース 2018年9月11日

「カッターナイフを自分の首に突きつけて『死なせてくれ!』って。ものすごく怖くて、母と必死で止めました」こう体験を話してくれたのは15歳の少女です。この10年、父の病に悩んできました。精神疾患。偏見などをおそれ、周囲に言いづらいとされています。親が病のために子育てどころでなかったら子どもはどうしたらいいのでしょうか。（さいたま放送局記者 清有美子 あさいチ ディレクター 捧詠一）



### 精神疾患の患者 392万人

うつ病や統合失調症など精神疾患の患者の数は全国で392万人、その数は増え続けています。この中には数は分かっていませんが、病気によって不安定な状態で子育てをしている人もいます。

そして、その影には親の言動や態度などに翻弄されて悩む子どもたちがいます。こうした子どもたちの抱える悩みや問題が少しずつ分かってきました。

### “誰にも言えなかった”

精神疾患の父親に悩む 15 歳のみほさん（仮名）が話を聞かせてくれました。父親の様子が変わり始めたのは 10 年ほど前、



みほさんが 5 歳の頃でした。仕事を休んで引きこもるようになりました。落ち込んだかと思うと異様なハイテンションになり「そう状態」と「うつ状態」を行ったり来たりする双極性障害でした。

「気分が悪いとか頭が痛いとか言って部屋の中で寝てばかりで、機嫌を損ねると何をされるのか本当に分からないので、家にも話さないし、避けるようになってしまいました。もの知りで、優しくて尊敬できる父だったのに本当に変わってしまっただけで最初は信じられませんでした」父親は通院を続けますが症状は悪くなる一方で、みほさんも母親も父親の症状に振り回されるようになります。

そして、父親の状況は家族だけでは受け止められないまでに悪化していきました。2 年前、父親はカッターナイフを持ち出し自分の首筋にあてて「死にたい、死にたい…」と暴れ始めたのです。

身長が 180 センチ以上ある父を小柄なみほさんと母親で大慌てで止め、みほさんみずからが警察に通報しました。父親は総合病院に搬送され、その後、精神科病院に入院することになりましたが退院の際、病院からは、今後どのように過ごせばよいのか家族へのアドバイスはありませんでした。

「相談する場所や具体的な支援を紹介してくれればもっと違ったと思うんですけど…。結局、父親を家族だけで支える環境はなにも変わらず、状況も改善しないままです。2 年前の父親の自殺騒動はもちろんですがこの 10 年父のことは誰にも話したことはありません。精神疾患って『変な人でしょ?』って感じでイメージが悪くて家族まで遺伝するのではないかと差別されかねないのだから話せませんでした」(みほさん)



みほさんの話から精神疾患の患者と暮らす家族が社会から孤立しがちな現状が見えました。

### “見えづらい” “言いづらい”

「みほさんのように精神疾患の親がいる子どもへの支援はほとんど行き届いていません。そもそもどこに困っている子どもがいるか把握できていないのです」こう話すのは精神疾患の患者の家族支援に詳しい大阪大学大学院の蔭山正子教授です。背景にあるのは精神疾患という病ならではの「見えづらさ」と「言いづらさ」だと言います。

親の精神疾患に子どもたちは学校を長い間休んだりするなどの兆候をつかみやすいケースばかりではなく、見た目で見えないことも少なくありません。そして、病をより見えづらくしているのが「言いづらさ」です。蔭山教授は、親など周囲の大人が子どもに、「親の精神疾患については人に話してはいけない」と伝えているケースも多いと指摘しています。また、大人が病気についてひそひそ話す様子を見て“人に話してはいけないことだ”と思い込んで隠そうとする傾向が強まり、「誰かに相談する」という行為自体を思いつかない子どもが多いといえます。

### “子ども”の全体の6割精神的リスク高い

こうした子どもたちを巡って気になるデータがあります。精神障害がある人の家族会などで作る全国組織、全国精神保健福祉会連合会（みんなねっと）がことし3月にまとめた報告書によると、精神疾患の親のもとで育ち、成人した人のうち63.9%が、うつ病や不安障害の可能性が高いなど、精神的な健康状態が悪い傾向にあることがわかったのです。



### 大変だった子ども時代、語り合える場も

実際、取材した中でも心のうちを誰にも言えず、相談する場もないまま大人になったという人たちが数多くいました。

こうした中、同じような境遇で育ち大人になった“子どもたち”が当時の気持ちを打ち明け、共有できる場が開かれ始めています。

ことし6月に東京・清瀬市で開かれた日本精神保健看護学会で、あるワークショップ

が開かれました。

主催したのは精神疾患の親がいる人たちで作る家族会「こどもびあ」です。医師や看護師、研究者たちおよそ40人に向けて、子ども時代のつらかった思いや当時の悩みを話し精神疾患のある患者だけでなくその家族である子どもにも目を向けてほしいと訴えました。

「こどもびあ」はことし1月に設立され、大人になった“子どもたち”が定期的集まっています。集まった人たちの中には、「自分の経験を初めて他の人に話せた」という人や「同じような境遇で育った人と初めて出会った」という人もいて、参加した人たちは思いを打ち明けたことで心が軽くなったと話していました。

こうした集いについて精神疾患の患者の家族支援に詳しい蔭山教授は、自分の気持ちをすべて吐き出すことは、自分の過去と向き合い、未来に向かう力を得るために大切なことだといえます。「こどもびあ」はこうした集いを東京や大阪、そして福岡などで行い、今後、全国に広げようとしています。

### 周囲の大人は 何ができる？

今、まさに親の精神疾患に苦しんでいる子どもたちに私たちは何ができるのでしょうか。

蔭山教授は、まず、周囲の大人が「親の変化」や「子どもの変化」に気付いてほしいと話します。例えば、最近、出歩く姿を見かけなくなった、いつも来ていた集いに来なくなったなど、親の体調の変化を感じ取る機会は日常生活にあります。

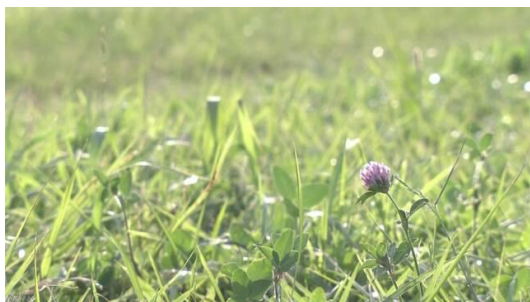
また同様に、子どもがサイズの合わない服を着続けているとか、以前より笑わなくなった、爪をかむようになったなど、言葉で訴えなくてもSOSを発信していることはあるといえます。

そのうえで、蔭山教授は子どもに対して、“気にかけている”“心配している”という姿勢



を示してあげてほしいと訴えます。

「話を聞いてもらえるだけでも、“救われた”と感じる子どもはとても多いのです。子どもは、なかなか心を開けないかもしれませんが、『何かあったら相談してね』『困ったら言ってね』など何度でも気にかけている、心配しているという姿勢を示してあげてください。子どもたちは精神疾患に対する周囲の反応にこれまでに傷ついてきた可能性があるので精神疾患という言葉に対し、過剰に反応せずに子どもたちの言葉を受け止めてあげてほしい



です」

#### どこに相談？

気になるケースが身近であったり精神疾患の患者の家族が相談できる窓口もあります。

「市区町村の窓口」「保健所」

患者の家族は福祉や児童福祉関係の窓口に尋ねてみてください。保健所も相談にのってくれます。

「チャイルドライン」

18歳以下の子どもは、NPOによる子ども専用の窓口「チャイルドライン」が電話で対応してくれます。(電話番号) 0120-99-7777

「こどもびあ」精神疾患の親に育てられ、大人になった人たち向けの問い合わせ窓口です。

(問い合わせ先)「[kodomoftf@gmail.com](mailto:kodomoftf@gmail.com)」

(ホームページ)「<https://kodomoftf.amebaownd.com/>」

今回の取材にあたり、小学生から成人した“子どもたち”まで多くの人に話を聞かせてもらいましたが皆さんが共通して言った言葉があります。

「早く大人になりたい」「早く大人になりたかった」大人に守られ健やかに楽しく過ごせるはずの子ども時代がない、なかったと彼・彼女たちは話していました。子どもたちの悩みや苦しみに大人がいち早く気づき、温かい目を向けることが求められていると感じます。

## 障害のある子と家族、幸せの瞬間を撮影 横浜で写真展 岩堀滋

朝日新聞 2018年9月11日



写真展に飾られる作品のうちの1枚＝後藤京子さん提供

写真スタジオのカメラマンとして活躍していた女性が、出産後、子どもに障害があるとわかり、同じ境遇の子どもや家族の笑顔あふれる「幸せオーラ」を撮りたいと、再び一眼レフを引っ張り出した。撮影を重ねた作品を集め、初めての写真展開催にこぎつけた。女性は「人生で一番やりたいことに巡り合えた」。いま、充



実した日々を過ごす。

横浜市都筑区の後藤京子さん(44)。昨年12月から100組の親子を目標に撮影を始め、現在は約90組。障害者手帳などの有無に関わらず、撮影を希望する家族を撮ってきた。

写真展にはそのうち約60組を飾る。ダウン症の子どもが多いが、身体障害児もいる。楽しげな笑顔の親子が多いのが印象的だ。

## 強制不妊手術、今月調査へ 県方針で障害者団体に聞き取り

読売新聞 2018年09月11日 長野

旧優生保護法（1948～96年）に基づき障害者らが不妊手術を強制されていた問題で、県は今月中にも県内全域で活動する約10団体を対象に、聞き取り調査を始める方針を固めた。

県保健・疾病対策課によると、手術を受けた当事者や家族らと面談し、手術の実態や国への要望などを聞く。不妊手術を受けた障害者の中には、過去の経験を語ったり、公にしたりしたくない人がいる可能性にも配慮し、各団体と相談しながら対応する。

県聴覚障害者協会が8月、県の調査とは別に、手術の実態を調査して公表した。今後、聞き取り内容の公表に同意し、国による救済を求める団体が出てきた場合、県も連携する。強制不妊手術問題を巡り、県は、県内の医療機関や福祉施設合わせて約1900か所を対象に手術記録の提出を依頼しており、今月中にも集計結果を公表する。

## 信州大医学部（長野県松本市） 子どものこころの発達医学教室教授 本田秀夫さん（54） 中日新聞 2018年9月11日

### 「診療医認定」仕組み構築

「みんなで楽しく、個性的に、おもしろおかしく生きていく世の中がいい」。柔らかな笑顔でこう語る。

子どもの発達障害を専門とする信州大医学部の児童精神科医。二十年以上、さまざまなタイプの発達障害児を診療してきた。その経験を生かして、今春から、学部内に開設された「子どものこころの発達医学教室」の教授となり、地域の医師ら約七十人を教える。発達障害児を診療できる医師を養成するのが狙いだ。信州大病院では、症状の重い発達障害の子どもの診療も担い、多忙な毎日を送る。

大阪府豊中市出身。脳の研究者にあこがれて東京大医学部へ。だが、大学の勉強が次第に難しくなり、授業に出なくなった。そんな中、なぜか精神医学にだけは興味がわき、卒業後は、当時珍しい症例だったアスペルガー症候群に関心を持つように。「子どもも診られるようになったほうがいい」との先輩の助言を受け、児童精神医学の道を志した。横浜市総合リハビリテーションセンターで二十年間勤務し、さまざまな発達障害児の診療と支援に没頭した。



「大学時代、授業を欠席した経験が生きている」と話す本田さん

信大病院には、二〇一四年春、「子どものこころ診療部」の部長として赴任した。長野県は人口二百万人に対し、発達障害児を診療できる医師はわずか十人ほど。南北に長く、交通の便も悪いため、発達障害を専門としない小児科医と精神科医が独学で勉強し、地域ごとに診療しているのが実情だ。

このため、希望する医師が定められたカリキュラムを受講し、試験などで一定の基準を満たせば、県による「専門医」の認定を受けられる仕組みをつくった。これに合わせ、医師と福祉機関や学校などの担当者が会合を持ち、障害のある子どもに関する情報を地域ごとに共有するシステムも構築する計画で、その中心的な役割も担う。

「発達障害児の診察ができる医師が増えて各機関の連携がうまくいけば、周囲の理解が深まり、発達障害の子どもたちが生活しやすくなる。偏見をなくすことにもつながる」と力を込める。

東大時代に授業を欠席した経験を「大変だったが、今の仕事に生きている」と振り返る。発達障害で不登校になる子もおり「不登校になった子どもの気持ちが分かるんです」。午前六時に出勤し、帰宅は午後九時すぎという生活が続くが、「毎日をお気楽に過ごすこと」を

心掛けている。(中津芳子)

## 障害者もボランティア

読売新聞 2018年09月11日



「聴覚障害」と記したビブスを着用し、ボランティアに参加する黒川さん(坂町で)

黒川大樹さん

◇豪雨被災の坂

聴覚に障害のある大阪府高槻市、公務員黒川大樹さん(29)が、西日本豪雨の被災地を一人で訪れ、復興ボランティアに参加した。障害者によるボランティアは全国的にも珍しく、黒川さんは「聴覚障害」と書かれた特製ビブス(ベスト)を着用して、健常者とともに汗を流した。



「耳が聞こえない自分が活動する姿を見て、一人でも多くの障害者が参加してくれれば」と願いを込めている。(伏山隼平)

◇大阪の男性 特製ビブス着け作業に汗

「後ろから声をかけられても聞こえません。ゴメンね! 皆頑張ろう!」。先月30日、土砂が流入した坂町の住宅地。背中にメッセージ入りのビブスを着た黒川さんが、マスク姿で家屋に流れ込んだ土砂をかき出していた。

大阪府生まれ。4歳の時に難聴と診断され、20歳で自分の声も聞こえなくなった。見た目は健常者と変わらないため、普段の生活では、周囲の人に障害を気付いてもらえないことが多いという。

特製ビブスを作ったのは2015年。趣味のマラソン大会に出場したときだった。後ろを走っていたランナーとぶつかり転倒。レース終了後、「周囲に障害を伝えれば、接触はなかったのでは」と考え、試行錯誤の末、ビブスに「聴覚障害」と書き込んで目立たせることを思いついた。

高槻市役所に勤務。6月の大阪北部地震では、同市役所の罹災証明を担当し、落ち込む被災者を目の当たりにした。「災害ボランティアをしたい」と思いを募らせるようになった。

西日本豪雨から1か月たった8月上旬。「人手が必要なはず。協力したい」。自分から障害を伝えることで、コミュニケーションをとるのに役立てようと、ビブスをバッグに詰め、岡山県倉敷市真備町と、坂町をそれぞれ訪問した。

ビブスの効果もあって、現地では、ボランティアや住民から、手順や作業場所を身ぶり手ぶりで教えてもらい、円滑に作業を進めることができた。

今後も被災地に赴く予定だ。黒川さんは「耳が聞こえなくても人を助けたい気持ちに差はない。障害者でもできるんだということを、健常者にも障害者にも知ってもらいたい」と話した。

◇自立や雇用創出に期待

障害者が復興ボランティアに参加する動きは、西日本豪雨以降、県内で広がりつつある。関係者からは、「社会的自立や雇用創出につながる可能性がある」と期待の声が上がっている。西日本豪雨では、県ろうあ連盟(広島市南区)が、聴覚障害者対象のボランティアセンターを設置。約100人の障害者が登録し、清掃や土のうづくりなどに参加した。同連盟の横村恭子さん(60)は「被災者に喜んでもらい、障害者自身も『できるんだ』と自信を持つようになった」と効果を強調する。

ただ課題も残る。障害者差別をなくす活動をする日本アビリティーズ協会(東京)の伊東弘泰会長(76)は「障害者は支援を受ける側で支えるのは無理だ、という偏見がまだまだある」と指摘。「障害者が参加できる環境を社会全体でつくり、障害者自身も参加する意思を示さなければならぬ」と話した。

## 福祉施設の対策は？ 大規模災害がテーマの講座を無料配信

福祉新聞 2018年9月11日 編集部

右が講師の村野さん



障害者施設で働く人向けにオンライン研修事業などを行うNPO人材開発機構（東京都新宿区、水谷正夫理事長）は、大規模災害時に福祉施設が取るべき対策をテーマにした動画を作製した。毎年のように全国各地で災害が起きていることから、少しでも福祉施設の役に立てばと、無料で公開している。期限は

未定だという。

同機構は2016年から、パソコンやスマートフォンなどを利用して、障害特性や福祉制度など100講座以上をいつでも学べる「サポーターズ・カレッジ」というサービスを開始。研修の資料を作る必要もなく、1講座当たり15分程度の気軽さが好評だ。全国の事業所とインターネットでつないで議論する事例検討もしている。

今回の無料公開講座は全4本。いずれも大分県別府市の防災推進専門員、村野淳子氏が講師を務めている。

講座は施設の事業継続計画（BCP）を立てる際に確認すべき事項や、リスクの洗い出し方法について解説。具体的に別府市で策定している支援の仕組みや、災害時のケアプランの作成手順なども説明する。さらに福祉施設が担う福祉避難所の実態や事例も紹介し、「適切な避難所へ誘導するための専門性も必要」と強調している。

水谷理事長は「東京都では今年度から福祉サービス第三者評価項目にBCPの策定が入ったが、どうすべきか分からない福祉施設は少なくない。災害は日本全国どこでも起きる可能性があり、多くの福祉施設に見てもらえれば」と話している。

◇サイト=<https://live-learning.jp/b/>

## 【浪速風】大災害に存在感ない野党…チョコちゃん「ポーっと生きてんじゃねえよ！」と一喝して

産経新聞 2018年9月11日

土砂崩れの現場では懸命の捜索が続けられた＝7日午前、北海道厚真町（彦野公太郎撮影）



NHKのクイズバラエティー「チョコちゃんに叱られる」にはまっている。先週の放送では「おじいちゃんの眉毛が長いのはなぜ？」という問題が出て、お懐かしや、村山富市元首相が登場していた。雑学の勉強になるが、何

と言っても番組の主役は5歳の女の子、チョコちゃんである。▼おかつ頭の着ぐるみで、クイズに正解すると「つまんねえヤツだなあ」とぷいっと横を向く。不正解の時は、顔を真っ赤にして「ポーっと生きてんじゃねえよ！」。目にはメラメラと炎が燃え、頭から湯気を噴き出すのは、コンピューターグラフィックス（CG）の技術を駆使しているらしい。▼土曜朝の再放送の方が視聴率が高いそうだ。小欄も寝起きにチョコちゃんに叱られると、ポーっとしていた頭が目覚める。国難ともいべき相次ぐ大災害に、国会議員は何をしているのか。とりわけ野党の存在感が薄い。チョコちゃんに「ポーっと生きてんじゃねえよ！」と一喝してもらいたい。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行